

《西洋史研究室の現在》

西洋史読書会シンポジウム「西洋史における時代区分をめぐって」

金澤 周作

2017年11月3日の第84回西洋史読書会大会では、午前の個別報告に続いて、午後は、約120名の聴衆が集まる中、小山哲氏の司会の下、4人の報告者を迎え、標記のシンポジウムがおこなわれた。「西洋史において時代区分とは何であるか、またそれは如何になされるべきかを改めて論じよう」（南川高志氏「趣意書」）というのが、本シンポジウムの開催目的であった。

南雲泰輔氏は、「西洋古代史の時代区分と「古代末期」概念」と題する報告において、国内外の諸研究を丁寧にフォローしながら、「古代」と「中世」の間に設定されるようになった「古代末期」という時代区分の射程を重厚に論じた。江川温氏は、「長い中世について——ル・ゴフおよびフランスの若手研究者たち」の中で、ル・ゴフの「長い中世」の提起を受けたのち、新しい世代の研究者が、グローバルな文脈において「西欧の勃興」を説明するべく、各々の「長い中世」論を展開している様子を活写した。古谷大輔氏は、「近世／近代の時代区分をめぐるミッシングリンク——ローカルな問題とグローバルな問題／アカデミックな問題とパーソナルな問題」において、古代から現代に至る時代区分の中でもっとも影響力の大きな「近代」という概念が持つ二つの「欠陥」——地域史と世界史の流れの間のずれと、アカデミックな歴史と個人的な歴史の間のずれが内包されている——を指摘し、それを修復する試みとしてのスウェーデンの歴史学実践を紹介した。そして4人目の小野沢透氏は、「「現代」と「同時代」のあいだ——現代史のさまざまな可能性」の中で、「現代」から「同時代」を切り分ける試みを示した上で、この「同時代」の特質を素描し、最後にこれを近代以降の流れと接続して、過去200年ほどの歴史をどのように再区分できるのかについて、大胆な仮説を示した。

コメンテーターの金澤は、次のような論点を提起した。時代区分はどこの空間を区切るものなのか（⇒南雲）、時代区分には「西欧の勃興」を説明したいという欲求が不可避免的に含まれてしまうのか（⇒江川、古谷）、政治史的な区分のオルタナティブは社会史・文化史的なそれになるほかないのか（⇒南雲、江川、古谷）、そして、ある時空間に関して、それを現在進行中の「同時代」ととらえる人と、過去としての「現代（史）」であるとみる人とは現実には併存しているのではないか（⇒小野沢）。

また、フロアからは、「西欧の勃興」の影に隠された時代区分の可能性や、「中世」と「近代」の間に「近世」を括りだす意義、西洋史と世界史の時代区分の異同への繊細なまなざしの必要を指摘するものから、来るべき近現代史の「終わり」の予想を問うものまで、実に幅広い観点から意見が出され、報告者たちと活発な議論を展開した。

いずれの報告者も、個別の研究実践の現場においてなされる多様な時代区分（ある枠のな

かの間仕切り)の存在価値は認めつつ、そうした細かな間仕切りをゆるやかに束ねる、メタな、大きな時代区分(外枠)の刷新の現場に光を当てた。そこからあらためて確認されるのは、時代区分はかならず主観的、恣意的だということである。ただし大事なことは、そのようにしてしかなされ得ないとして、あるべき時代区分(論)とは、それが提起されることによって歴史の理解が一段と深められるものであるという点である。その意味で、4人の報告とその後の議論は、きわめて有意義であった。

(京都大学教授)